

文脈で区別する字



(i)は、最初の **御** が「御」、次の **江** は、その次が「戸」なので、「江戸」です。次の「表」は余り崩れていませんから、わかると思います。

次の **被** から少し難しくなります。この字は、右に寄せて小さく書いてありますから、平仮名や片仮名だという想像はできます。この字は「江」という字で「へ」と読みます。今でも、演歌歌手などのサインに「さん江」等と使うことがあります。この場合は、はっきり「江」ですが、崩しがひどくなると、「江」と「**被**」が同じ字のようになります。どちらに読むかは、文脈次第というところもあります。

次の **為** は、第 19 回以来久しぶりに出てきた字です。次の **召** が「為」とわかれば、比較的簡単に「被」と想像ができます。「被為」で「なされ」と読みます。すると、次の **召** が問題になりますが、第 10 回にも出てきた「召」という字です。今回の方がきれいですが、それでも慣れないと読みにくい字です。次の **候** は「候」です。

次の **御** は「御」、次の **義** は、第 32 回の(d)でも **義** と出てきた「義」です。この部分は、右上の全体像の 2 行目の始めの方にありますから、(字は小さいですが)確認してください。最後の 2 文字は「二付」でしょう。したがって、(i)をまとめると「御江戸表江被為召候(江戸表へ召し為され候)御義二付」となります。

(j)は、最初の **両** だけが難しい字です。この字は「両」という字です。この字とほぼ同じくずし字に「雨」という字があります。「両」と「雨」は文脈で区別するしかありません。また、**両** という崩しを含んでいる字に **満** という字があります。これは「満」という字で、割とよく出てきます。また、並べて書くと「満」と区別がはっきりできますが、文章の中で出てくると紛らわしいの

が **傳** という字で、これは「傳(伝)」という字です(第 30 回でも少し解説しました)。最後の二文字は、「宿内」で、これは簡単でしょう。(j)は「両宿内」となります。

